

大森健二先生を偲ぶ

大沼芳則

前常務理事、大森健二博士が逝去されまして早くも一年になります。先生は昭和40年以来35年に渡り協会の重責を担い、お一人で始められた日本建築研究室を今日の姿に発展させる功績を残されました。

春惜しむ花びらにじみまた涙 平成12年4月22日逝去されました。遅咲きの御室の桜を愛し、毎年夜桜の下で宴を催されておりました。花の季節は巡ってきましたが、そのお姿は仁和寺の花園に見つけることは出来ません。

大森先生は故村田治郎博士の教えを受けて日本建築史を専攻され、中世建築技術史の研究に深く傾倒されました。

今回この追悼文を書くにあたって古い記録を調べていたとき、昭和35年に伊藤久氏が死去された際の大森先生の追悼文を当時の機関紙『古建築』の中に見つけました。

伊藤先生は戦後再開された文化財建造物保存修理を担当する文部省の建造物課の技官として、乾兼松先生と共に保存修理技術の最高権威者であり、生き字引と言われておられました。大森先生は若き工学士としてこの伊藤先生に対抗意識を抱き、この人を越えることを目標にして努力されたようです。昭和30年に文化財修理技術者の講習会が発足し、私も講師をされた伊藤先生と親しくお話しさせていただく機会に恵まれました。そのお話の中で「君が求めているものを叶えてくれる人が京都にいる。今は府庁の一職員だが、いずれ主幹として文化財修理の指導的立場に立つ人だろう。しばらく待ちなさい」と言われました。伊藤先生はこの言葉をお忘れではありませんでした。それから間もなく大森先生は滋賀県の文化財係長に就任され、現場を転々として高知県にいた私は滋賀県の技師を拝命することになりました。昭和33年の秋に初めて大森先生にお目にかかりましたが、その独特な感性と豊かな人間性に驚きました。

先生は文化財所有者の立場を特に重視され、補助事業による建造物修理工事については、それぞれ親身になってご援助されていました。また我々修理工事に携わる現場職員の待遇改善のために尽くされました。行政官としては型破りな人でありましたから、その後京都府庁に転任されてから行政面での立場を縮められたことは誠に残念なことでありました。しかしその後のご活躍を見る限り、このことが先生の生涯を通じて大きな業績につながったものと考えております。

今でも滋賀県庁時代の先生を偲びますと、楽しい思い出が次々に湧き上がって若き日のお姿がよみがえって参ります。この頃と同僚と語り合うとき、それは修理屋一家のような親しみがあり、先生は我々の大兄貴のような存在でありました。物事にこだわらない大変磊落なご性格で、人情味に溢れていました。

晩年はそれほど見えませんでした。壮年時代の先生は体格がご立派で、酒豪でありましたから、宴会ではしんがりまで修理屋一家が残って痛呑、得意の柔道の型まで飛び出して、我々弟分を相手にお座敷を稽古場にしてみました。軍隊時代に覚えられた踊りや、古い流行り唄を演ずるときのお姿が目には焼きついております。趣味も多彩な方で、学生時代に夢中になったという歌舞伎の世界には特に詳しく、小唄なども稽古に励んでいて、お座敷でよく披露されました。

滋賀県庁に残った私は、先生の元で仕事をしたいという想いがつのり、昭和45年に協会職員として採用されましたが、以来30年に及ぶご指導をいただきましたことは、私にとって幸運な人生に恵まれたものと感謝しております。

先生のご業績は数限りなくありますが、なかでも西芳寺本堂の設計や清涼殿の復元などは白眉の逸品であります。文化財修理の調査ではそれまで見失いがちの小屋組調査を徹底的に行い、全国の類似資料を調査検討されました。大報恩寺本堂の修理報告書はそのときの記録を詳細にまとめあげて後資とされました。他に平等院鳳凰堂や醍醐寺五重塔修理工事報告書など私にとって座右の教典となりました。建築学会賞、密教学会賞や中世建築技術史の研究著書など優れた足跡を残されました。

日本建築研究室の礎を築かれました大森先生の御業績に報いるよう、職員一同たゆまぬ努力を続けて行くことを誓い、ご冥福をお祈りいたします。